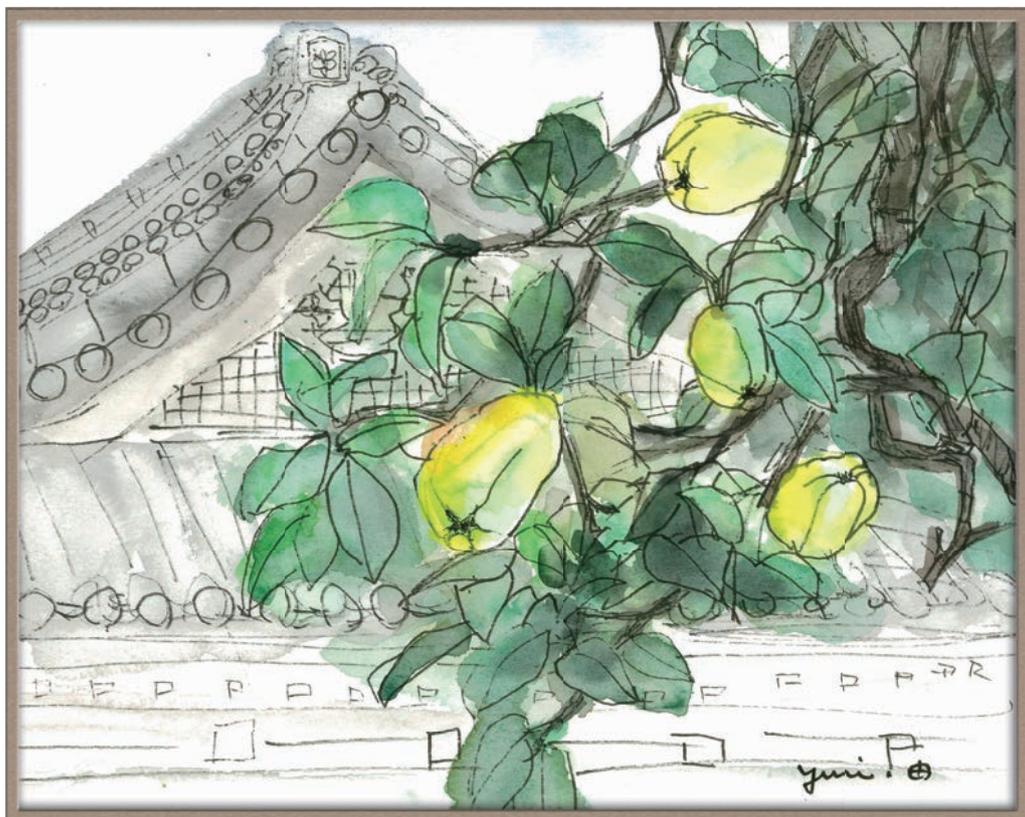


三河 アララギ

2021年 令和3年12月 師走

十二月号

第六十八卷 第十二号



ニューヨーク日記(182) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

JAPANESE COMBS

Blue Shoe Diaries



この櫛もう数えきれないくらい前から持っていたけど最近よく使うようになってその使い良さに目覚めました。この櫛は「十三や」と言う創業1736年お店で職人さんが一つ一つ手で作っているのを考えると、凄くない?もともと長年この櫛を使っているお母さんのお買い物に着いて行った時に私も!と言って職人さんから直接買ったものです。なんかこの様な再発見って嬉しいよね。

I've had this Japanese kushi, comb, for a long time but only recently began using it and it's amazing. In true Japanese tradition style, this comb is made by a shokunin at Juusanya, 十三や, which was established in 1736, isn't that insane? My mom has always used this comb which is how I got this one when I tagged along to go buy a new one right where the artisan worker makes these combs by hand. Don't you just love rediscoveries?

アカンサスの徑

御津磯夫

何のその痛き腕かひなもわが祖おやの丹野城址たんのじょうしの碑いしぶみを書く

ま夜中に咲きしを朝に採りて挿すまたよみがへる花ならなくに

昨日鳴きて今日に鳴かざる寒蟬をこころのうへにおきて午睡す

生活の単純化とは臥床なりと歌ひたまひて四年の命

午前より高くもりして笹の葉の秋の一葉もしばしゆらがず

十月の庭の光りにひくくとぶ黄の蝶を宝石の如く見るべし

山藍の秋ふたたびの青き葉の幼きしげり露したたらす

萩の枝垂れしはやく種子むすぶ心もともにすこやかにならむ

この世なるたのみごころの無きいまも土に埋むる木の実草の種子

木鋏をつね持ちて出づわがひとりとはる小徑を庭につくらむ

三河アララギ歌集Ⅲ

大須賀寿恵

両殿下ともに見給ひし護岸をも高潮はつひにのり越えて来ぬ

高潮に根さへあらはに洗はれし浜木綿の一つが青き芽を吹く

退職勧告受ける人らの入り来て関りなき吾にも頭をさげる

四月には何処の学校に居るなら転出希望の欄書き終へぬ

何故に口利かぬのが知りたくてカナリヤが卵を産みし話す

レ線写真の説明してゐる医師の顔が次第にぼやけて見えなくなりぬ

胸椎を病む吾を残して課員みなソフトボールの試合にゆきぬ

吾にも吾子と呼ぶべき幼ありて動物園の熊を見に来ぬ

御用納めの式が終れば未施行の書類も机にをさめて帰る

三日つづきの休み終りし事務室に水仙の花の水かへて居り

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

静まれる屋敷竹藪の隅にしてかをりただよふ終の季

引馬野を歩ましし茂吉ありありと今年も言ひつつ松の下の萩

わが夫の代官屋敷は御維新にわれの古里は敗戦に消ゆ

みづからの手にて生くべき職業を持てよと言ひきわが父母は

プランターの優しき菠薐草抜きをれば夕べ正しき正林寺の鐘

言葉など通じなくとも相逢ふをたのしみゐると伝へくるはや

ギリシアにて見たりしことを指して言ふ庭のアカンサスの艶々緑

頬を寄せ肩を抱きて別れたりはるけく来りてわが家の二時間

良き客に白玉椿の一朵を活けおくことをもセリーナは知る

丸々とせる平仮名の整ひてお爺ちやま and お婆ちやまへと

三河アララギ歌集Ⅲ

小野田 昱代

地の神を祀る屋敷隅に山茶花の今年もひそかに咲きて散りゐつ

明日の米研ぎあげて厨の灯消す心安けし常のことにも

父の掌の棘探すなり掛けゐたる老い父のその眼鏡を借りて

ふさふさの水菜を笊に洗ひあげひしがれし思ひ立ち直りゆく

指貫をしてゐしあとのくびれたる指を伸ばしぬ一日の夜に

海見ゆる教室に二年教へたり勤め終る今日も海白く照る

代掻きを終へし田の面の夕茜明日の早苗を運び込むなり

穂を垂るる稲田に光あまなくて時かけてわが草鎌を研ぐ

刈株のそれぞれに影を持ちをりて今年の稲の稲架しづまれり

唐鍬もて祖父の墾きし山畑の荒れつつ今年も蜜柑色づく

青色青光
しやうしきしやうこう

蒲郡 岡本八千代

わがダチュラ花も葉もみな青色に光りて見ゆるけさの朝かな

久しぶりに晴れて風吹く朝にしてまたもやわれに希望湧くごと

老いてなほもの書き本を読み進むこの倅はせを誰にも言はず

しかれども財布をどこへ置きたるかすぐに忘れて探す探す吾われ

探しもの探してゐたらばわが古き「ぎんどうろノート」といふが出できぬ

「ぎんどうろ」といふはウラジロハコ柳風吹けば葉裏の光り鳴らしき

まだ半分は「ぎんどうろノート」は使えるよさつそく今日から何かを書かむ

杖つきて軒下にしばし佇ちてをり庭の空気の草木の空気吸ふ

独りなば独りの自由の哀れさよ今夜は静かな哀れさにして

わが庭の志賀山寺萩ゆれてをりああ御津先生下されし崇福寺のこの萩よ

寺萩のゆれゆれの中の亀石にも腰かけてをらず君は天つ人

われのみが独り残りて昔を今をたゞたゞ偲ぶばかりなるかな

読まず書かず言はざるままに横たはり降らず吹かざる日暮となりぬ

しばらくは今吹く風に吹かれをり庭草茫々の中のわたくし

ほやほやのご飯を先ずは佛前に供えて我の一日はじまる

思い出の中を

豊川 弓谷 久子

さまざまの世相の中を生きて来ぬ昭和も遠くなりにつけり

テレビより懐しき歌聞え来る思い出の中を暫しさまよう

心ときめく先生なりき小学校の若き教師は権田先生

詩を作り文章を書く楽しさを教へてくれし先生なりき

先生の手作り文集「星野の子」我が作文も載りていたりき

ひるがのの高原のコキアがテレビに写る庭のコキアも赤く色づく

ひさびさに訪ね来りし子の友に我が手作りのパジャマを上げむ

保育園に我が子と共に通いたる幼な馴染みの子の友なりき

転ばぬようにとやさしき言葉幾度も我にかけつつ帰りゆきたり

付け呉れし手摺りに縋りて上がり下り楽になりたり我の生活

楽しみて育ててゆかむえんどうの苗の植わりしプランター届く

買物に便利と言はれ今日も又端布れにて縫ふ買物袋

夏日より晩秋に一日で変りたりこの気温差についてはゆけず

電気毛布子が入れくれたりほっこりと今夜は眠らむ夜の明くるまで

今年また祭り囃子も花火の音も無くて神無月過ぎゆけり

観音経

東京 今泉 由利

守らるる苔属苔科の苔の寺静かに静かに息をしてゐる

土質と空中湿度の加減良し西芳寺の蘚類苔類せんたいツノゴケ類

西芳禅寺畏み座せり写経する延命十句観音経を

白白と白花連なるエゴの枝織り込みたりき生きゐるタピース

二日程足らざることのいとほしい私の窓に十三夜月

十三夜の月の光を招きたりほのぼのとしてほのぼのとゐる

私の窓の範囲を過ぎゆけり十三夜の月の余韻のこして

あすなろ
翌檜は檜と育ち良材に聖観音像彫りゐるところ

朝い出て夜になりたる心地するトンネル長く羽田に着きぬ

ツイと来てツイと行きてしまひけりシオカラトンボの居た空間よ

奄美大島に降りたちぬトンボ・蝶・あめんぼ・いもり・みんな近くに寄り来てくれる

何枚目の葉っぱかしらヒカゲヘゴの葉っぱを数ふ

虫達はすこやかにあり三々五々飛びきたり飛びてゆけり

昔とても昔のことといふヒカゲヘゴは恐竜の餌と

おおぶりの椎の実コロコロ落ちているスダジイの実かと推す

稲の花

豊川 安藤 和代

便りなき友を案じて電話すれば曾孫の守りに忙しいと言う

降りてやみ止みては降る今日の雨紫式部の濃淡深む

バアチャンの煮物美味しと孫言えば嬉しく今月も鍋にいっぱい

薔薇檸檬麒麟漢字で書く競争三回共に孫に負けたり

鉢植えの lindo 窓に飾りたり小さき秋が私をつつむ

もつともつと威張りて咲けばいいものを葉陰に小さく稲の花見ゆ

しっかりと丸めて捨てしビニールの真夜にはつれる音の不気味さ

ファンでした櫻井くんが結婚すさびしく嬉しく秋風の吹く

風吹けば風の短歌詠み雨降れば雨の短歌詠む吾れの幸せ

石巻山弓張山脈見ゆる部屋短歌詠みつつこの秋も過ぐ

小春日和

春日井 清澤 範子

吾が娘に促^{うな}がされつつ歌を書く今日の陽気は小春日和と

吾の眼は斜視にて右の眼鏡にレンズをはりて過す毎日

吾が斜視の手術は十一月十二日家にて朝夕検温の日課

名大にて斜視の手術を受けると決め娘がわたしの世話検温

ブラックコーヒーやはり甘味の恋しかり吾は微糖のコーヒー選ぶ

剪定したる庭にて空を仰ぎ見る澄みし白雲風に流れて

十月も何かと手続き慌ただしいただく娘に委ね過せり

病院の窓から見える窓のあり桜の紅葉診療室の前

夫亡くもいつも笑顔を忘れずに娘と共に強く生きたし

頑張りて娘洗濯してくるるとり入れる時太陽^ひの匂ひをぞする

台風の風強く吹く裏窓にコトコト雨戸押して雨降る

寒暖の激しき日なり予報士は棒をふりふり夏日の予報

芳しき

大阪 伊藤忠男

万博のローズフェス聞き心向く祝う青空紅き街路樹

芳しきかぐわ香り懐かし秋日向行き交う顔に安らぎの色

やっと明け秋の花園久しぶり友の笑顔に日の光指す

太陽の塔とて表裏おもてがあるこちらは沈む夜の顔なり

バラ園に花の満ち蜜満ちたるや秋風吹きて君に届くや

何もなき青空のみの写真あり咄嗟にシャッター押した証か

植物も遺伝子変えて枯れる様増え過ぎ避ける自然の摂理

栄えてもほんのひと時人の明日自壊の道が進化の果てか

芳しきかぐわ花の香りはひと時でやがて散り行くその日忘れじ

理不尽なことの多きに流行語参った参ったまたも参った

美麗しき

東京 矢崎直人

山梨のお墓に参る妹の結婚せしを報告に行く

よきそらに恵まれ結婚式しきの穏やかにやわき光に包まれにけり

一枚に収める写真撮るために脚立にやつとカメラマン立ち

あの顔もこの顔も皆よく似てる顔見合わせて親戚の顔

連れ立ちて遥輝はるきと斗輝ときの兄弟の指輪持ち来る大任果たす

祝福のうちわが妹のいつのまによき嫁さんになりにけるかな

お父さんお母さんそしてお兄ちゃんへ妹手紙読み上げくれし

めでたくはコロナに地震ありしなか遠くはるばる揃いし面々

でかくとも優しき声で語りかけ耳遠き祖母に新婦の席から

遠き日のアルバム捲りめく懐かしむあんなことやらこんなことやら

美麗うるわしき新郎新婦信州の山の色づき光と風の

ローム層

東京 森岡陽子

とろけ地蔵秋の夕焼背にうけて足元転がる銀杏いくつ

ノクターンの曲流れ来る秋深き二夜の月を見るが楽しみ

おもむきの変わりし十五夜十三夜二夜の月や雲間に皓々

秋澄むやフルートの曲愁ひありムーンリバーは御洒落に装ふ

ビル街の屋上庭園真中株分けされしニュートンのリンゴ

溪谷のローム層には草もみじ赤色ひかる濡れ色に

変り行く風の吹く向き何時からか虫の鳴き声すがれなり

草の花色青淡くうす紅の名も分らずも心安らぐ

三河黒松

豊川 白井 信昭

み社の秋のまたもや境内のあちらこちらに松かれてゆく
星越の海岸通りはるか沖大型船の二隻よこたふ

台風の兆し現われ濁る海静もる三谷のヨットハーバーは

三河湾ひとつ海にして繋がれる御馬港また三谷漁港は

家近く農道をゆく道の辺に小サギひとつ動くともなし

境内に三河黒松林立の太く古きが幾本もあり

音羽川宮浦の太松おおまつ騒めにき昔を想う行在所跡

古の引馬野想うよりどころ遥かな時代の風を伝へて
いにしえ

持統帝宮浦の御所に一月余り滞在の謎なぞしる術すべもなし
ひと

今は亡き師の三河アララギ創立の八十九年の歲月すぎゆく

徒然夜長

蒲郡 杉浦恵美子

露天湯に蜻蛉一匹浮かびをり仰向けざまに宙に蹴きて

溺れたる蜻蛉に指を近づけてそつと小枝に移してやりぬ

我と蜻蛉秋空の下ただふたつ束の間の刻ともに生きてる

コロナ禍の共同浴場ひと気がなく蜻蛉と我と零るる湯の音

先程来羽音煩し我が周り季節外れの蚊が現はれる

煩しと思へどこの蚊の我が前のかそけいきいのちは明日をもしれぬ

アジュール刺繡光を透してクリスマス縦の木模様浮かびたり

先程来炬燵の配置を迷ひけり急に冷えたる十月の朝

この炬燵見る度思ふ霜月の夫居ぬ暮らしの徒然夜長

然はあれど秋の夜長の徒然もかれこれ十年過ぎにけるかな

合 格

豊川 山口千恵子

思ひつき夕餉に赤飯炊きてゐる今日は夫の誕生日

この日頃会話するのは夫とのみ訪なひ来る人もまれなり

濁り水たたえ流るる音羽川雨上がりたる土手道歩く

水漬ける休耕田におりたちて白鷺二羽はのろのろ動く

穂垂れし稲田広々つづく上白鷺一羽低く飛びゆく

アンケートのハガキ一枚書き終へて仕事をしたる心地してゐる

大楠の青葉繋れるその根元の小さき祠に供華新しき

無住寺の庭にすがれし彼岸花やがて青々葉萌へ出でむ

新しき立札立ちぬ田の脇に河原田遺跡と謂れなど書きて

合格の通知のありと知らせくるるひな子受かりぬ教員採用試験

何処より

豊川 夏目勝弘

方丈記に足は乗り物と言ひ得たり我が乗り物もこの二本の足

二足にて歩くことを許されし我は人間ひたすら歩く

正しく見正しく語る行動は正しく歩む日日の日課とし

田の道を歩む前を三密にアキアキネの忙しげに飛ぶ

法師蟬の声を聞きしは一度のみ短かく拙き声ぞ淋しき

朝にも夕べも蝸の声を聞かず早や立秋となりてしまひぬ

光陰は矢より速やかと称へしありき祭りのメ縄を作る時期なり

水割りの氷を作ることなく今夜の熱爛のしみくるうれし

咽の渴き闇に起き立ち台所今夜は中秋の名月なりき

水なくば生きてはゆけぬされどまた豪雨の水が人を死なせる

モノ総てに上下左右表裏行きたき道は中なる道ぞ

今日読みし本の内容たちまちに消え去りてをり何が残るや

夏の去り秋もまた去りああ冬が冬の寒さのあまり気にせず

去りては来るこの平凡が人生か還りて行く先何処なるべし

雨となり川となりて海となる自然もまたこのくり返し

『ハルカ』

西浦公民館 いーはとぶ

豆乳に甘酒混ぜて今朝も飲む今日のひと日の活力涌くごと
巣籠もりの生活なれど季は過ぎ遠くより聞こゆ蟬の声かな

稲吉友江

籠る日の今日こそ開く短歌綴りわが初めての「原山の」歌
それぞれに内科眼科へとこの朝あした夫も私も出かけゆくなり

鈴木美耶子

清めんと日々過ぎたり葉月の日々盂蘭盆会その十人の笑顔
幼らの好物求め寄り道す定期購読の本添へやらむ

吉見幸子

おむかへも相合傘も見当たらず駄駄にて買ひしビニール傘を
長雨のあけて残暑の厳しきに実りなかなか小さきイチヂク

牧原正枝

注文は「カレーにチーズのトッピング」孫は迷はずお子様ランチを
四波五波とコロナ感染拡がりて吾が町にまで波寄せてくる

森厚子

降りつづくカーポートに落つる雨その音タイコのパチ打つごとく音のす
すつくりと莖の数本背のびして垣根の下に彼岸花咲く

山崎 俊子

小六の書写の授業に芭蕉の句生徒らも書く背すぢ伸ばして
夕飯時眼閉ぢつつ我が娘新社会人の仕事山積みか

伊藤 晴江

久しぶりに孫に逢ひたり秋彼岸コロナ禍ゆゑのひとときにして
声変りしたる男孫と読経する黒きマスクのテノールの声

三田 美奈子

うなじ垂れ来るはずもなき主を待つ日々いちぢちぢ草よまばゆき陽の中
山椒に絡む朝顔遅咲きのその青すがし今はそのまま

水野 絹子

秋の来てわれは日課の栗拾ひさすがカラスの声も遠くに
わが畑の秋の味覚の柿無花果みのりを待ちて野鳥の群れかな

牧原 規恵

現代学生百人一首

東洋大学

「えっかわいいう」JKの言う「かわいい」はこの世で一番信用できない

近畿大学附属高等学校一年（大阪府）

宗川弥生

あの山の豪雨でくずれた爪あとが記憶とともに消えていく春

広島県立呉工業高等学校一年（広島県）

河崎蓮

ただの鉄それだからこそ俺達の技術使って命吹き込む

広島県立広島工業高等学校一年（広島県）

山根飛和

実習着一年以上着ていれば今ではもはや私服のようだ

広島県立広島工業高等学校二年（広島県）

徳佐拓真

鑿^のを研ぎ緩む口元照れかくしうまくなつたな祖父の一言

広島県立広島工業高等学校三年（広島県）

濱^{はま}井^い大^{たい}季^き

「おかあさんまた勉強」と怒るキミいつかこの日を理解できるかな

広島市医師会看護専門学校医療高等課二年（広島県）

豊^て島^{しま}由^ゆ紀^き

音と音阿波の踊り子騒ぐ街待ちきれないよと心が疼く

阿南工業専門学校一年（徳島県）

可^か原^{はら}悠^{ゆう}人^と

元号をスマホ片手に待ちわびてSNSで令和と知りぬ

阿南工業高等専門学校五年（徳島県）

高^{たか}島^{しま}雄^{ゆう}太^た

贈呈誌

森岡陽子

月虹 142号2021年10月号

○ ゆらゆらと歩けばおほきなる宙に虹が二重にかかるゆふぐれ

横山鈴子

○ 後になり先になりして紋黄蝶ひらりひらひら命をつなぐ

保坂征子

○ 夏払う風は未だに来たらざれば深夜の月を重く仰ぐか

成島哲子

○ 這松の匂ひふかぶか胸に吸ひ稜線に佇つわれは空つぽ

清水和子

○ 真夏とはいえど朝日は清々しカーテンを引き恵み享受す

水上信子

冬雷 2021年11月号

○ 朝一番鏡のなかに遥かなる父とそっくり目元が映る

澤木洋子

○石段の割れ目に芽吹くドクダミは抜いても直ぐに芽吹く緑葉

池 亀 節 子

○全身をぐるぐる巻きに乗っ取られツツジはかづらに変身したり

高 橋 説 子

○むざむざと錆びて傾く鉄柵の脇に沿ひ衰へぬ粗毛反魂草

関 口 正 道

○ニット帽のつば先あげて一つ咲く薔薇を嗅ぎあひ少女笑みあふ

水 谷 慶 一 朗

○用水の遊歩道にて草引けば百日紅の花びらが落つ

林 美 智 子

○道の辺の捨て積みのごみの間より朝顔咲き出で目立つ桃色

山 本 貞 子

○其処此処に命尽きたる禅あるさ避けつつ歩む蝉しぐれのなか

鈴 木 や よ い

○隣接の寺の庭にてきそひあふ蝉はずめに負けてゐる今朝

大 塚 照 美

○暮れ方の東の空に稲妻が地面を突き刺す如き一瞬

江 藤 ひ さ 子

ああ国連平和の鐘は鳴る

高橋育郎

朝な夕なに 鳴る鐘は

鐘の響きは 地球を巡る

あれは国連平和の鐘よ

世界平和を 祈る鐘

世界平和を 誓う鐘

生きとし生ける すべての命を

二度と許すな 戦争の惨禍

守り続ける あの鐘に

命の尊さ 守るため

感謝の気持ち 伝えよう

聖なる鐘よ とこしえに

ああ 国連平和の鐘よ

歡喜の歌を こぞつて歌おう

澄み渡る空 果て遠く

オリーブの鐘

高橋育郎

1 きいろい ひかり

つぶらなひとみ

オリーブの実は かわいいな

お日さま にこにこ

みんなも にこにこ

鐘が鳴ってる うれしいな

2 風は そよそよ

やさしく ゆれて

オリーブの木は うたってる

なかよし みんなは

げんきで あそぶ

鐘を鳴らそう たのしいな

3 白い 十字の

すがしい 花よ

オリーブとおく 日本まで

平和の とうとさ

つたえて きょうも

祈りの鐘が ひびいてる

4 月は まるいよ

銀いろ 夢よ

オリーブそつと ねがってる

あしたも みんなの

えがおが みたい

鐘がしずかに 鳴ってます

『俳句』

菰樽の並ぶ参道秋祭

山元正規

懐かしきかの人の文字秋扇

古書店の昼も灯ともす秋の雨

棚田なる案山子は弓を持て余す

松本周二

獣臭微かに森の秋深む

開いては無駄なメールを消す夜長

秋の宵パークッションの交叉の手

森岡陽子

機首向かふ先に消えゆく秋夕焼

ローム層の濡れ色の染む草紅葉

コンサート之余韻纏うて月夜道

重野善恵

屋上に皆揃ひたる十三夜

通夜帰りひとしを淋しつづれさせ

群生の真つ赤に揺るる曼殊珠華

浜田紀政

教会の鐘の音海へ七竈

怪物のマウンドを去る暮の秋

少年の片耳ピアス新松子

植村公女

花鋏パチパチ鳴らし菊日和

上野駅公園出口大銀杏

佐野ぬいの濃き青淡き青も秋

今泉如雲

原罪といふものこと林檎熟れ

とくとくと新酒や津軽びいどろに

山の色よろしき^{こわね}声音妹の

矢崎直人

秋の空つくづく似てゐる親戚の

妹の結婚伝ふ墓参り

勝つでなし負けるでもなし温め酒

今泉由利

太古へと思ひを繋ぐ実銀杏

摘み取る一位朱実の甘かりき

銀杏を十粒ばかりの朝ごはん

今年米炊きあがりたり神々し

江ノ電もジオラマのごとし月明り

木村歩歩

満月や人影もなし白き闇

空高し金時山に針の雲

川岸に友を求めて石たたき

息切れて青空に柿の実ひとつ

かさね吟行会

「泉岳寺」 10月

濱田紀政

十月八日、集まったのは男女それぞれ四名の八名。場所は高輪ゲートウェイ駅。品川と田町間の新駅で開業したのは令和二年。駅舎を設計したのは国立競技場の隈研吾氏。折り紙をモチーフにした大屋根や障子をイメージした膜でバッチリお洒落。自然光を取込んでいて快適だ。後に掲げた句は毎回の吟行に一番乗りの素山さんの句。素山さんはかさね句会の最高年齢者で、常に到着後はぶらぶら歩いて発想を練っているとこの事だった。

モダンアートめく駅輝きて秋暑し

素山

駅の周辺はまだ工事中で重機が唸っていた。やがて高層ビルや大型ショッピングビル、ホテルなどが出来るらしい。現場から高輪築堤が見えた。明治五年、新橋と横浜間を走る列車の線路を敷くため海を埋めた。近代化を象徴した築堤は時代を経て新駅へと生まれ変わった。

た。

泉岳寺までは徒歩で十分位だった。秋半ばだが暑さが残っていた。

十二月十四日の赤穂義士祭には多勢の参拝者が訪れ、線香で墓石も見えなくなる程だがこの時期は人の姿もなく歩きやすい。門前には四、五軒の土産物屋があるがシャッターを降ろしている店もあった。

色変へぬ松の大木寺の門

京子

初紅葉木漏れ日を踏む泉岳寺

紀政

墓石に刻まれた享年は若者が多く、大石主税は十六歳。矢頭右衛門七は十八歳で二十歳にもなっていない。戒名の上部に「刃」下部に「劔」の字があった。墓守に尋ねると中国の仏教書である「碧巖録」に、傑出した人物は刃や劔の上を平気で歩く。義士達は傑出した人物だと当時の住職が刃と劔の字を刻ませたという。

刃と劔入れし法名木の実落つ

さち子

四十七士の墓それぞれに秋深し

正規

墓石の欠けて並ぶやうろこ雲

陽子

江戸城内の松の廊下で浅野内匠頭が吉良上野介を斬りつけたことが事件の発端である。勅使饗応役（江戸時代、天皇に派遣された使者を接待する役）を命ぜられた浅野匠頭は指南役だった吉良上野介にお礼の金品を渡さなかったため、気分を害した吉良上野介は饗応の仕方を教えなかった。恥を欠いた浅野匠頭は刃傷に及よび、即日切腹、浅野家は取り潰しになった。

浅野匠頭は田村右京太夫の庭先で切腹した。その血がかかったと伝えられる梅の木と庭石が泉岳寺にある。梅は今鬱蒼と茂っていた。

浅野匠頭は辞世の句を残した。

風さそふ花よりもなほ我はまた春の名残をいかにと
やせん

赤穂浪士になった大石内蔵助は吉良家に討ち入り遺恨を果たした。吉良上野介の首を浅野匠頭の墓前に供える前に首を洗った井戸がある。

薄紅葉首洗淨の井戸枯れず

周二

照明を小さくし、薄暗くした赤穂義士記念館の展示場

に人の姿はなかった。討ち入りに使った武器や義士連名書状、口上書が並べられてある。口上書は討ち入りの趣旨を述べたもので複数あり、一通を吉良邸の門前に掲げ他は主なる者が懷中に忍ばせていたという。死を賭して浅野匠頭の無念を晴らそうと決意した四十七士の思いが読み取れる文だった。

資料館でて浮世の芒かな

善恵



『酔いの徒然』(一一六) 丸山 酔宵子

『ロシアでシャンパンと呼べるのはロシア産のみ』

驚くなかれ！ 最近、ロシア発のとんでもない報道が飛び込んできた。

【7月2日、ロシアのウラジミール・プーチン大統領が、第171連邦法令「アルコール商品の規制について」の改正法案に署名し、同法令は7月6日に発行した。】というニュースである。

この改正法によって、これまで使用されてきた「スパークリングワイン」というカテゴリー名は「スパークリングワイン、ロシアのシャンパンを含む」に変更される。その結果、ロシア語のラベルに「シャンパン」と記載していた輸入シャンパンは、ロシアの消費者向けにはロシア語で「スパークリングワイン」と書き直すことが必要になる。

改正法のもう一つのポイントは、原産地呼称規制に関わるもので、今後、原産地呼称規制（農業に関するヨーロッパの制度で、農産物や食品の原産地名そのものを独

占的・排他的に利用できる権利を保護する制度）は、ロシア国内で製造されたワインを保護する制度となり、輸入品には適用されない。つまり、大変おかしな話であるが、ロシア産のスパークリングワインこそ唯一正式なシャンパンであり、フランス本場のシャンパンは、ロシアではシャンパンとは言えず、フランス産スパークリングワインとなるのである。

言うまでもなく、世界的には、「シャンパン」と言うのはフランスのシャンパーニュ地方で生産されるスパークリングワインだけに許された呼称であるが、ロシアの新しい改正法に従うと、その名称保護はロシアでは適応されない。

この大胆な改正案はロシア国内外のワイン業界で大きな波紋を呼び、ドン・ペリニオン、モエ・シャンドン、ヴーヴ・クリコといったフランスの高級シャンパンをロシアに輸出しているモエ・ヘネシー社（Moët Hénery Group）はロシアへのシャンパン輸出を中止すると発表した。

ところで、ロシアと「シャンパン」の問題は今回が初めてではなく、ロシアでは昔からスパークリングワインのことを「シャンパンスコエ」と呼び、祝いの席に欠か

せない酒として親しまれている。この改正法は、ロシア国産品を保護する狙いに加え、欧州中心の「原産地呼称制度の押しつけ」に反発する意図も見え隠れするのである。

この原産地呼称の問題は世界的に様々な問題を起こしている。例えば、ポルトガルの世界に誇る「ポルトワイン」もその一つで、サントリーの土台を築いた「赤玉ポルトワイン」もポルトガルからクレームがつき、現在では「赤玉スイートワイン」に変更している。また、中国の紹興酒も本来の紹興酒は中国浙江省紹興市で造られた醸造酒「黄酒（ホワンチュウ）」のことを指す。故に、台湾産紹興酒は「紹興酒」言うてはいけないのである。

今回の問題のシャンパンについても、つい30年前までは、フランスのシャンパン有力メーカーは、上質な葡萄を求めスペイン各地でシャンパン製造技術指導（瓶内二次醗酵）を行いつつスペイン産シャンパンを大量に生産し、堂々とシャンパンとして本国へは勿論、世界各国に売っていたのである。しかし、近年になって「原産地呼称」を掲げて「スペイン産はシャンパンと言ってはなら

ない！」としてしまったのである。

かわいそうなのはスペインのシャンパン生産者で、シャンパンの名前が使えないのならばと考えたのが、「CAVA（カバ）」なのである。「CAVA」は元々「洞窟」の意味で、ワインを貯蔵熟成させる洞窟つまり広大な地下倉庫なのである。

CAVAの主要生産地はカタルーニア州バルセロナ地方で、本場フランス・シャンパンを超える素晴らしい生産者が数多く集まっている。スペインの燦燦とした太陽をいっぱい浴びた葡萄から作られる「CAVA」は、本場シャンパンに劣らぬ味わいをも持っている。それとともに、何が決定的に素晴らしいかと言えば、其の値段のお手頃なことで、シャンパンの3分の1程度で手に入るのである。

・・・それでは、今宵は、冷え冷えのCAVAで立ち昇る泡を眺めて乾杯と行きますか・・・。

立ち昇るバブル弾かせ冬立ちぬ

立ち昇るカバのバブルを爽やかに

酔宵子

楽しい時間 109

山本紀久雄

2021年10月31日

九代目市川團十郎・・・其の十五

九代目市川團十郎は「明治の御代」の到来という「改良が漸く出来る気運」をいち早く見抜くことが出来たことで、今まで抱き続けてきた志（演劇改良）の実現へ向かって行動していくことになったが、そこに政治体制側からの指示が続いた。

明治5年（1872）2月、東京府庁は中村、市村、守田三座の座元を呼び出し、以下の内容を通達した。それは、最近、高位高官の方々や、外国人の芝居見物が増えつつある。よって芝居はすべからく下品、荒唐無稽の類を慎み、積極的に社会教化の具たる役割を果たすべしと、芝居人に対し心構えを下したのである。

明治政府も布達で「明治の御代」における芝居のあり方を具体的に示した。同年4月の布達には「都テ事実ニ反ス可ラス」（『新聞雑誌』第40号 明治5年4月）と明記され、これは、九代目が年来抱き続けてきた真実への憧憬と奇しくも軌を一にするものになった。

このように九代目は、政府による新たな芝居の方向性を受けて、「演劇改良」の正当性を自覚し、「すべての拵えをその時代を調べた」舞台を展開することにしたのである。

ところが、九代目の「演劇改良」に対して観客が不満をもった状況が、明治11年6月の新富座新開場にあたって舞台にかけられた「松栄千代田神徳」への評判からうかがい知れる。「松栄千代田神徳」は、徳川家康の前半生を「三河後風土記」の中からエピソードを抜粋し綴ったものであるが、九代目は、「有職故実」の知識を駆使し、芝居の世界における武士に時代考証を施していくこ

とで、絵巻物にみえるような武士の扮装に近づけようとし、これは服装だけでなく、「台詞・科」や「近習の侍が膝行する」姿まで及んだ。

九代目は「故実を正して」いくことが、舞台面に「真実」を出現させると考えていたわけで、舞台上の虚構性の排除による「事実」の追求をしたわけである。

これが明治10年代を中心にして九代目が行った「活歴もの」である。

しかし、見物客は「故実を正した」松栄千代田神徳の舞台が、あまりにも「今までの芝居において見ることがなかった新式」であったため、「事実」として受けとめるどころか、「絶対否認」という拒否反応を示したのである。今まで見慣れていた様式美というべき歌舞伎世界とかけ離れていたため、不満をもらしたのである。

だが、九代目は、見物客の冷罵・痛罵にもかかわらず、これ以後も「活歴もの」舞台を次々と勤めていく。遂に九代目の「故実を正」そうという思いは、識者を中心とする有職故実研究会ともいうべき組織の結成に至る。これが、明治16年（1883）1月に発足した「求古会」である。

「求古」すなわち「古を求める」という名称には、舞台面に「真実」の世界を展開しようという心血を注ぐ九代目の思いがみとれる。

「求古会」のメンバーは、『松栄千代田神徳』が舞台にかけられたころから九代目に助言を与えてきた松岡明義や依田学海、国学者の黒川真頼、小中村清矩、川辺御盾、岡本綺堂の父・岡本半溪などを、学者、旧幕武士、画家、彫刻家、古美術鑑定家といった顔ぶれを顧問に迎えて結成されていた。

しかし、見物客は、「故実を正」すという「過去の羅列」を「種の邪道」として批判的に受けとめ、「ある者は痛罵し、ある者は冷笑し」ていった。「活歴もの」への批判は、明治17年12月猿

若座の新開場にさいして舞台にかけられた『北条九代名家功』に対する評判からもみてとれる。『北条九代名家功』は、歌舞伎狂言の演目。全三幕。一幕目の通称『高時』で知られる。作者は河竹黙阿弥。時代物。新歌舞伎十八番の一つ。

多き活歴物が断絶している中で、この『高時』のみが現代にも生き長らえているのは、昔も今も変わらぬ権力者の愚かさという主題、単純明快な筋と天狗舞の面白さ、「北条九代綿綿たる」などの名科白などが観客に受けるからである。

九代目は高時にはかなりの自信をもっており、明治20年(1887)4月、明治天皇の御前で行われたいわゆる天覧歌舞伎でも演じられ、天皇から「天狗舞は特に面白し」と言葉をもつたほどであった。

初演時、天狗舞以外は不評で、仮名垣魯文が風刺した漫画(河鍋眺斎筆)を『歌舞伎新報』に掲載させて批判し問題となった。その一件を岡本綺堂は著書『明治劇談・ランプの下にて』に次のように記している。

『わたしは子供の頃で、詳しくその事情を知らないが、当時の『歌舞伎新報』にポンチ絵のようなものが掲載された。それは高時の天狗舞の図で、一見しては別に仔細もないようであるが、高時が団十郎の似顔にかかれてゐるのは勿論、それをひき廻している天狗どもが、すべて求古會員に擬らえてあるというの



であった。天狗の数も會員と同数で、かの絵さがしと同じように、その天狗の顔や翼をたどって行くと、會員の苗字がごとごとく平仮名で現われるということを誰かが発見した。つまり団十郎が求古會員に翻弄されているという諷刺であるというので、本人の団十郎がまず怒った。求古會員もこれは怪しからんと言ひ出した。詮議の結果、それは狂言作者の一人で『歌舞伎新報』の編集者たる久保田彦作の仕業に相違ないと決められて、久保田氏がその抗議の矢おもてに立つ事になった。実際それが久保田氏の仕業であったかどうかは判らないが、ともかくそれを掲載した雑誌の編集者たる責任上、同氏から鹿爪らしい謝罪状を提出して事済みになったそうである。その当時、わたしの家ではもう『歌舞伎新報』の購読をやめてしまっていたので、どんな絵が出ていたのか、私は知らなかつた。岡本綺堂が見ていないという『歌舞伎新報』第484号(明治17年11月21日)の挿絵を、国会図書館のマイクロフィルムのリールをハンドで苦労して回して探してきたのが左図である。

正倉院宝物の贋写をはじめ様々な絵画御用を務めた川辺御盾が『この天狗の舞に就て歌舞伎新報に悪摺が出たのですが、その書が皆な種々の天狗になつて居て、私が絵具皿を冠り刷毛を持つて居る』、『依田百川がヨ田の物模様の着物で百といふ字の顔の髭天狗、関根只誠(松屋七兵衛)が自分の似顔で、鼻高幸四郎の錦絵を持ち』、『この連中が団十郎の高時が病鉢巻に、三桁で三鱗を利かした着付で舞つて居るのを真中に囲んで、法隆寺の絵巻物を見よや、東大寺の御物を見よや』と云つて、囃し立てて居る處なのです。『これはつまり高時は九代で滅亡したから、成田屋も九代で滅亡するのだ、それもこの連中に煽てられて滅亡されるのだという悪摺なのです』等と述べた。

編集者たる久保田彦作は、舞台面における「真実」の追求を、見物客が決して望んではいないことに気づいてほしいという、九代目への願いをこの挿絵に託したものと推定できる。

絹の話 (133)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹を着ると気持ちが良いわけ

昔から絹を着ると「気持ちが良い」と言われますが、絹を肌に触れる様に着るか、繭のどの部分をどの様に加工（精錬、撚糸、織密度など）された糸で織られた物に着るかによって、その感触は人それぞれです。

主な要因を考えてみました。

糸が細い

一般的（家蚕）な繭糸は1.5〜3.5デニール（1デニール=1,500m/g）でよく頭髮の1/20の細さと言われます。柔らかいものを表現する時「絹ごし豆腐」のように、絹のイメージがよく使われます。真綿などは幼児の肌の感触に近いものがあります。人はしつとりして柔らかい物に触れると神経伝達細胞の働きで、その感触が脳に伝わり、幸せホルモン（オキシトシン）の分泌が促され、気持ち良いと感じます。

絹鳴り

絹の繊維はおにぎり型をしていて、蚕が糸を吐く時、朝夕の温度差で糸が太くなったり細くなったりします。さらに吐糸始めの糸は太く次第に細くなって行きます。この不均一な繊維が織物などで密になり互いに擦れ合っで「ククク」という片栗粉を握った時の様な音を出します。この音が「絹鳴り」ですが、糸の精錬の仕方です人間には聞こえる時と聞こえない時があります。

人はこの音を肌で感じると心地よい気持ちになります。絹は日本の伝統楽器の弦に使われ、この音を上手に引き出すことが演奏の名手ではないでしょうか。

アミノ酸の効用

シルクは人であれば体外から摂取しなければならぬ9種類の必須アミノ酸と体内で作られる2種類の非必須アミノ酸から出来ている親和性に優れた繊維です。

*アミノ酸諸機能は人の体内にあつて機能するもので、体外からこれらのアミノ酸が同じ様に機能しているとは思えません。しかし地球上の絹を作る10万種余に上る生物が、長い進化の歴史の中で、その多くが繭と同じ様に自身を守るカプセルとして利用してきた事に留意すべきだと考え、主なアミノ酸の機能を調べました。

シルクフィブロインのアミノ酸の中で最も大量（45%弱）に含まれるグリシンは体内リズムを整える神経伝達

物質で、気持ちを穏やかにし、良質な睡眠を誘います。またコラーゲンの1/3はグリシンで構成されていますので美肌効果もあると言われています。

アスパラギンはコラーゲンの生成を促し、エネルギー代謝を促進し、乳酸菌の生成を抑制するので疲労回復に繋がります。

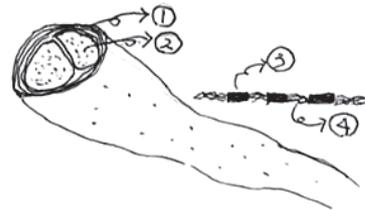
含有量の30%を占めるアラニンは肝機能を促進し、グリココースを作り皮膚の保湿性を高め、アルコール代謝機能が見られ二日酔いにも効果的です。

ほんの僅かしが含まれていませんがシスチン(0.3%)は余剰活性酸素を中和し排出するので老化抑制に働きます。

必須アミノ酸の多くには疲労回復、美肌効果が見られ、トリプトファン(0.2%)などでは自律神経のバランスを整える幸せホルモンの一種(セロトニン)を増加させるので気持が和らぎます。

糸の構造

蚕から吐糸された糸は①外側に4層のセリシン(25%前後)というアミノ酸と中心部分の②フィブロイン(70%~80%)というアミノ酸で構成されています。糸にする段階でセリシンは精錬という工程で除かれて、少し残留するもののフィブロインが生糸になります。



フィブロインは縦にアミノ酸が並んだ繊維で、約100本のフィブリルから出来ており、さらにそのフィブリルは約900本のミクロフィブリルで構成されています。ミクロフィブリル③は40%の固い結晶と④60%の軟結晶で作られており、この軟結晶の部分が溜池の様に水分と空気を調整しています。さらに蚕から糸が吐糸される時、糸の横に水分を放出する穴ができます。この穴が毛細管現象でいち早く水分を吸収するので、絹を着るとサラットして暖かく、それでいて肌がしっとりとして気持が良く、肌荒れも防げると言われる所以です。

絹の気持の良さを最大限利用する

昔の人は風邪をひいた時、喉に真綿を巻いたり、はん纏や布団に真綿を引き延ばして使いました。

軽くて暖かく、蒸れることなく気持が良いものでした。絹綿のシート、毛布、枕、ネットクピローは次世代のエコで素晴らしい健康素材です。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2021年11月8日

今の時期の水分の種類

夜半に雨が降ったらしく

朝の空気が寒いながらも丸く感じます

予報では今年はずっと寒くなるようです

今から体調を崩さない様に準備が必要です

ここ最近

頭痛

足のつり

便の不調

などの水分補給不足の症状が多く出ています

気温が下がると喉が渇きにくくなるので

水分が中々すすまなくなりますよね

前回の本田のひとり言にも書きましたが

胃腸の不調も出ています

食欲も減るし水分も取りたいと思わなかつたりします

そこで

夏場はおすすめていなかった胃腸にふたんのかかり
について

水をこの時期お勧めします

職場や出先でもペットボトルをや水筒で

摂取量を確認できるのも良いですよ

水分不足からくる頭痛などの症状が出た時は

1度に500〜1000mlを1時間位で飲む

これはあくまでも緊急用ですので普段は

ゆっくり時間をかけて常に血流を良くして

身体を潤わせましょう

今日も笑いながら行きましょう

2021年11月12日
ため息の代わりに

朝の空気が澄んでいて気持ちが良いですよね
空気が澄んでいるとついついしてしまうこと

それは 深呼吸です

同じ呼吸でも敬遠されがちなのが ため息 です

昔から ため息をすると幸せが逃げる

など言われてきました

身体的には ため息は重要だったりします

どんな形であれ脳や体内に酸素を取り込むことは大切
なんです

でも

確かにため息は感じが良くないですよね

そこで

ため息をつきとつになつたら深呼吸に切り替える

それにより益々身体に酸素を取り込めるし見た目も

バッチリです

起床時も布団から出る前に深呼吸

外出する前に深呼吸

仕事の合間に深呼吸

一人になつたら深呼吸

疲れたら深呼吸

湯船の中で深呼吸

就寝時に深呼吸

といった具合に深呼吸を多用すると

リラククスも出来るし仕切り直しも出来ます

まさに息抜きですよね

ぜひ意識してやってみてください

今日も笑いながら行きましょー

「江上浩二の独り言」 48 江上浩二

プラズマ

言葉は多才、複雑だなど、最近実感した事があった。翻訳の仕事をしたり、主に英語の資料を分析解釈しているコンサルの仕事をしていると、辞書のごとく英語のある言葉が日本語の特定な訳語に1…1に対応するなど稀であつて、文化の多様性で腹や胸の辺りをグサツと刺されるようなある種、変に高揚する気分になる。このような言語文化の課題は時間と変遷が絡む現代日本語と古文の関係にも言え、要は理解される様に分かりやすく噛砕いて伝えることが出来ればほっと安心する。

物を意味する言葉、形容する言葉、感情表現する言葉、抽象的思考状態などを表現する言葉へと、だんだんと文化の差が広がると言葉の表現もかけ離れて、時には日本文化にはあるが欧米文化では無いとか、その逆も多々あることを経験している。

さて、最近プラズマというカタカナ英語（外来語）が気になるのである。明治時代の文人はカタカナ読みの外

来語は使わず、漢字の意味を吟味・尊重し、出来るだけ漢字2文字の「好字」スタイルに表現した努力と才力には敬服する。理系の私はプラズマと聞くと plasma state、すなわち、ものを構成している原子がバラバラになり、電子や原子核が分離してしまうような高エネルギー状態を思い浮かべてしまうのである。

というのは、最近国内メーカーの商品でプラズマ乳酸菌をうたっているものがあつて、その名称にプラズマというカタカナ文言を使用しているので、一体どんな乳酸菌なのか、その理由・由縁が気になったのである。その商品のメーカーはラクテイス・プラズマというカタカナ文言を引用して、その商品説明では、プラズマ乳酸菌は免疫細胞を取り仕切る直接プラズマ・サイトイド樹状細胞に働くとあり、プラズマ・サイトイド樹状細胞は元の英語表記は調べると plasmacytoid dendritic cell となっている。樹状細胞が dendritic cell であり、plasmacytoid をやっつけければ私の気は少しは澄むだろう。医薬系の資料では 共起表現・形質細胞様の樹状細胞という専門用語が使われている。私に混乱の状態へもたらしたプラズマはプラズマ・サイトイドからきており、共起表現・形質細胞様という訳の分からない漢字で表記したものが原因

であった。

しかしこれで終わりでない。訳の分からない漢字の羅列の正体を突き止めないと、私もすっきりと出来ないし、お付き合いして読んで頂いている方にも合点してすっきりしてもらいたいのである。そもそも、英語のプラズマという文言が年代的には

1712年、ラテン語・ギリシャ語の型で作られたとか、薄く広げたという意味の plasma を語源として形状、かたちを示すものとされた。

1845年、血液の液状の部分、遊離細胞の血球やリンパ球などを示すとされ（生化学領域）、

1928年に物理の世界でイオン化したガスを意味するものとなったと詳しい英語の辞書に書かれていたのである。

私は1953年生まれ、1700年代や1800年代の古い生化学の事などの知識もなく、最近の物理のプラズマ状態という極めて限られた世界の事のみを信じ、それが普遍的な事だと変な理解をしていた為にこんな顛末になってしまった。プラズマとは、血液の赤血球を除いたもはや赤色をしていない黄色味を帯びた一見一様に見える液体を当時の光学顕微鏡で見たと、沢山密集し

た小さなつぶ状の物であり、人の健康や病気に関わっているという大発見をして、そういった微細な形状の密集体を意味したもののだと納得できた。

最近、もつと悩ます non-cognitive skill を非認知能力と和訳している分野があり、これは認知能力が低下した高齢者の認知症の事ではなく、これをノン・コグニティブ・スキルとカタカナ表記して済ませる事も出来ない。年明けの近いうちに、また咳いてみたい。

令和3年11月2日記す



初狩便り (1)



花野みぷり



山梨県大月市初狩は、お江戸日本橋から百キロ、甲州街道の宿場町である。西に鶴ヶ鳥屋山を望み、北には笹子川の流れる棚田で私たちは、無農薬、有機の米づくりに挑戦して、四度目の収穫を終えた。今年の米の出来栄は、まったく本当に上々で、それはおいしい米となった。

写真は、田植え直後、稲刈り前、はざ掛け・天日干しの私たちの田んぼの風景である。

灼熱の太陽の下での田草取りをはじめ、農薬と化学肥料に頼らない米づくりは人手をかけなければならぬ。次号からは、農作業の喜怒哀楽と初狩の風情を連載でお伝えしたい。

『先生』についての一考察

中屋保之

NHKのラジオを聴いていて、ふと気づいた事がある。医者に対しての呼び方が「先生」から「さん」に変わっている。ネット上での視聴者からも、放送の中で、医者に「先生」でなく「さん」と言っていたが、違和感を覚えるとか、小学生男子を「くん」ではなく「さん」と呼んでいたが、「くん」ではだめなのか、といった意見があるようだ。

国語辞典を参照すると、『①先に生まれた人。年長者。②学芸に長じた人。学者。③医師など、その道の専門家、指導的立場の者などを敬つていう語。④師として教える人。現代では、特に、教育にたずさわる人、学校教員をいう。また、自分が指導を受けている、あるいは受けた師。教師。師匠。⑤からかうような気持で、他人をあなどつていう語。やっこさん。大将。⑥（代名詞的に、接尾語として）相手とする師や、教員、医師、議員などを尊敬して呼ぶ語。かなり高い敬意を有するが、江戸時代には、狂歌師、幫間、しっかい屋などの通人、もしくは遊里関係にも用いられた。時に⑤のように、からかい気分で用いることがある。』との解説が載っている。原義は、①の『先に生まれた人。年長者。』らしい。私たちが最初に「先生」と呼んでいたのは、学校の教師ではなかったろうか。そして、病气やケガなどの治療を受けた医師が「先生」であった。更に長じてバブル華やかなりし頃、夜の街では大勢の「社長さん」とともに「先生」と呼ばれた酔客がいたはずである。師として教える人。教員、医師、議員などを尊敬して呼ぶ語。かなり高い敬意を有するゝはずの「先生」も時と次第によって随分と幅広い使われ方をされているようである。昨今、一部の「先生」の凋落ぶりを見るに及んで、初めて「先生」と接した純真な子供時代がなんとも懐かしい。

私の記憶での最初の「先生」は、幼稚園の園長先生である。団塊世代の私たちを受け入れるために新設された幼稚園の第一期生を迎えてくれた眼鏡越しの優しい目を今でも覚えている。真新しかった幼稚園から、まだ戦争の傷

跡が残る校舎の小学校は、新一年生の数を収容しきれずしばらくの間は午前クラスと午後クラスに分かれていた。迎えてくれたのは、定年間近かの優しいおじいさん先生だったが、すぐに新しい「先生」に代わった。油の乗り切った男の先生で、騒いでいる生徒に向かってよくチョークを投げていた。それが良く当たっていた、ような気がする。今なら立派なパワハラであろうが、こういう訳か嫌いではなかった。恐らく、私の価値観で彼は、前述の「先生」という範疇に入っていたのではないかと思いついている。

さて、今、私はある詩吟の会に属している。まさに『② 学芸に長じた人。学者。③ 医師など、その道の専門家、指導的立場の者などを敬つていう語。④ 師として教える人。現代では、特に、教育にたずさわる人、学校教員をいう。また、自分が指導を受けている、あるいは受けた師。教師。師匠。』で、『かなり高い敬意を有する』範疇の「先生」方に教えを乞うている。つまりは、私が「先生」に値すると思える人物を「先生」として接すればよいだけのことである、と不遜にも思っている。厄介なのは、この世界の慣例なのか、誰彼構わず「先生」と呼び合う傾向があるのには些か閉口する。少々へそ曲がりな私は、あなたにとつて私は、先生と呼ばれるほどの器量を持っているのでしょうかと問うてみたい。そうでなければ、「さん」で十分である。

《先生と言われる程の馬鹿でなし》先生と呼ばれても、必ずしも敬意がこめられているわけではなく、むしろばかにすることの多いところから、呼ばれていい気になっている者を軽蔑している。人をむやみに先生呼ばわりする風潮や、呼ばれて得意になつて人への批判を込めていう諺だそうである。自戒すべし、である。

「先生と言われる程の」という諺は、なんとという、いやな言葉でしょう。太宰治 風の便り より

少女の言によつて

信濃川を眺望して作有り

横山精真

女兒美を称ゆ 信濃の流れ

興を引き初めて登る 展望の楼

遊子感嘆す 春盎盎

片言佳景 心に刻みて悠なり

因少女言眺望信濃川有作

女兒称美信濃流 引興初登展望樓

遊子感嘆春盎盎 片言佳景刻心悠

(通釈) ○遊子…旅人。○盎盎…いっぱい満ちあふれる様。片言…わずかな言葉。○佳景…素晴らしい景色。○悠…ゆったりしているさま。はるか。

この詩は平成二十七年に作ったものだ。四月十二日、近藤岳玄氏が流派を超えて企画した「第二回 伝統芸能を伝承する集い」が新潟県知事の賛助を得て、新潟の「りゅーとびあ」と云う建物の五階に在る能楽堂で行われた。内容の豊かな大会で大盛会、大成功だった。

私は午前中、待機している自由時間にエレベーターに乗ると、六階に行く人が多いので、六階は何があつてのだろうと案内板を見ると「展望台」とある。「展望台があるのか」と、一人つぶやいたら、乗り合わせた小学生高学年か中学生かと思われる女の子が「信濃川の流れが美しいですよ」といった。右後ろから耳ざわりの良いやさしい声だった。それではと登ってみたら、三百六十度の展望台であった。広々とした平野にゆったりと信濃川は流れ、時は春、両岸や到る所に桜は満開で観桜の人も多いが都会と違ってごみごみとした感はなく、何とも心がほろほろとした気分になった。だけど、あの女の子は「桜」よりも何故「信濃川の流れが」と云ったのだろうか。もうそこに少女の姿を見つけることはなかった。景色に満喫しながら少女の言葉が次第に余韻嫋嫋として蘇ってきた。

大会が終わり懇親会で挨拶に指名された。私は大会の成功とエレベーターの出来事を述べた。「是れが文化であり、自然愛、郷土愛だ。然しあの少女は凄い！今一度会ってみたい」と。

そして今度は秋たけなわの今年十月三十一日、コロナ禍を縫って再び同じ催しに招かれた。

「信濃川の流れが美しいんですよ」のフレーズは仲間内ではよく知られ、再会するとひとしきりその話題が持ち上がった。「あの少女は、今、大学生だろうか、それとも社会人かな？」いずれにせよ何とも心地よい思い出である。

浜離宮

今泉由利

名園めいえんの池水瀛ちすいうみに通つらなる

径畔けいはん 熙々ききとして芳草ほうそうに充みつ

靉靆あいたいにして瑞雲ずいうん 感慨かんがいを催もよおし

幽吟ゆうぎん 唱和しょうわすれば 別天べってんの中うち

浜離宮

名園池水興瀛通

徑畔熙熙芳草充

靉靆瑞雲催感慨

行吟唱和別天中

○浜離宮庭園の真中の池の水は太平洋と連なって、地球に交ざる。それでいて旧来の日本のそのものであり、雀達は逃げださない、近くにおいて何やら啄んでいる。わけ知らない漢詩に挑戦してみるの図。

奄美大島泥染、藍染のこと

今泉 由利



○「絹の話」の「アトリエ・トレビ」企画に便乗、奄美大島泥染、藍染の旅。

○奄美大島でおこなわれている天然の染色方法。千三百年以上を継がれてきた。

○絹糸の蛋白質に、シャリンバイ（バラ科）に含まれるタンニン酸色素と泥田の中の鉄分（酸化第2鉄等）の化学結合を、百回も繰り返し、染色、堅牢（色落ちしない）光沢のある渋い黒色と染まる。

○先代工芸師さん、母の大島紬を染めて下さった。先代を継ぐ現工芸師さん、私のドレス染をご指導下さるのです。

「氷魚」のことから (251) 岡本八千代

今回、詩のようなものが出来たから書いてみる。題名は「そのままだに」

今日も一日

私に与えられた一日

いのちある一日

何かが悲しい

何かがうれしい

それが何だかわからない

わからないままの私

ありのままにありのままよ

生きている私

どんよくしてか

いや 自然なのか

何だかわからないままよ

すなおにして

そのまま

そのままに、

※こんな心境になることもある、老いばれの或る日でした。

実は私、斎藤茂吉記念館へ行ったことがある。そこで一冊本を買ってきたのだった。昔から独り旅を平気でするくせがあったような気がする。

この開館は昭和四十二年であったので、私はちょうど学校勤めを止めた時で、独りで見学に行ったらしい。茂吉は、彼

の称える「写生道」の文字が光っていたことを今にも浮かんで来る。そして私は「斎藤茂吉記念館」の本を買ってきたのだ。た。

茂吉の作歌への道は、幸田露伴つばねの文学と出会い、実世間的な教訓を織り交ぜた独特の処世訓に心を打たれ、その人格形成と作歌上に大きな影響を受けた。さらに一高に進んだ茂吉は最終学年の時に、正岡子規の「竹の里歌」を読んで、日常生活に即した写実主義に感銘を受けて、これを機にその精神を基本として作歌活動を行うようになったのであった。

茂吉は開成中学に通うころ、周囲の影響からよく文芸雑誌を読み、露伴や森鷗外の文学と出会った。また、樋口一葉の作品や、佐々木信綱の「歌の葉」、しかり「日本歌学全書」を求めるなどして、歌に関心を示し、やがて、子規に傾倒するようになったのであった。

斎藤紀一の浅草医院は、後継者となるべき男子に恵れず、将来を考えて、養子にする優秀な少年を探していたのだった。

茂吉は明治二十九年八月、佐原隆応の仲介によって、斎藤家の後継ぎとして医学を学ぶために、上京することとなったのである。

一高入学のあと、子規に啓発された茂吉は、模倣歌を作ったりした。また、「馬酔木あまのこ」の存在を知り、だんだんと作歌活動をしようになっ

てゆくのであった。私自身「アララギ」——「三河アララギ」に感謝する。

かくして、明治三十八年、医科大学進学の前に茂吉は、養父の意向で次女輝子の婿養子として入籍したのであった。かくして、茂吉は、子規という人の歌に傾倒するようになってゆくのであった。私自身「アララギ」——「三河アララギ」に感謝する。

泥大島 2011年7月 今泉 由利

四月は父の、五月は母の、誕生月。六月は父が、七月は母が亡くなつてしまつた月。

とてもとても父を、母を。何言わなくても分かり合えた日々。小さかつた時は、父にも母にも、少し離れて憧れていた。近寄ることに遠慮をしていたのだった。

長じては、文学、絵画、染色、織物：父母と同じ興味を分かち合うことができた。

学生だった頃、「結城紬の体験をしたい」と報告すると、すぐ父から「結城知るべし」と葉書が届いた。父母のサポートを受け、結城の里で、真綿から手摺りの糸を紡ぎ、腰と足とでバランスをとる「いざり機」の実習をしていたり、茜染、紅花染、南部紫根染、仙台平、刈安染めの黄八丈、ハマナス染料の秋田八丈、弘前のこぎん刺し、西陣のつづれ織り、手描き友禅：伝統の工芸を守つておられる方々直々の指導を受けていた。

さんが織という織二元で丁稚奉公をしていた時があつた。トイレ掃除などして私の宝づくりの時だったのだな。そして、その頃には、もう会えないかも知れないと思える外国へ行つてしまうことを考えた私に、父母は、日本の伝統の品々を揃えて持たせてくださったのだった。

その中には、泥染めの大島紬の袷と単衣と。

今、東京のひとりの家で、母の泥大島を羽織つてみる。何と美しい…。奄美大島の泥染へ行つてみよう…。

絹を研究している「従兄」が、梅雨の時を狙つて「泥染にゆく」という。付いてゆく。

日本列島をまっ白く覆う梅雨の雲の中を、飛んで飛んで…奄美大島。

雨は降り、声はすれど姿の見えないアカシヨウビン。深い緑の山懐。伝統工芸士の野崎松夫さんの教えを受ける。

まず目に入るのは、巨大な釜。車輪梅の木の荒削り材を入れて、長く煮だし媒染液をつくる。この液を、熱くしたり、ぬるくしたり石灰を入れたり…その都度にあわせる。

東京辺りでは、車輪梅は生垣になっていて白い花が咲き、その木を灰にして媒染にするけれど、奄美では、車輪梅は大きな木になるらしい。

車輪梅の液に浸し、絞り、また浸し…三度くり返した布を、田泥につける。

緑青色に美しい金魚藻を掻き分け、田んぼに入る。裸足になって土を踏んだこともない足に、ニユルル…だけではない。小枝らしきがつくつくとして、自身の体重をかけて立つことへの戸惑い。冷たい。ピクツと触るものもある。

鉄分を多く含むという田泥を布に擦り込み…田の上澄部分で濯ぎ、また泥につけ…を三度くりかえす。車輪梅の液に戻り三度をくり返し…田んぼに戻り、同じ三度をくり返す。好みの染め具合を求め、一日中でも、何日間でもこの中腰の作業は続く。

染める前の、糸を作る、緋をくくる、染める。そして織機にかける、織りあげる。気が遠くなるような作業が続き、私の大島紬の着物は出来たのだったことを知る。ありがとう。ありがとう。ありがとう。

月桃 2011年8月

島道に添ひて続くる白き花月桃といふ名をよろこべり

餅米の粉に蓬(よもぎ)を搗きこみて黒糖の味月桃の餅

香ぐわしき香りを放つ月桃の葉にくるまるる餅にやすらぐ

三朝(みあさ)なさな月桃の餅頬張れり奄美大島甘(うま)し美(うま)し

背高くてトゲトゲあざみの茎といふお浸しにし炒めたりし

足指をニユルニユルニユル田の泥の細かき粒子泥にて染むる

恐竜の思ほゆ巨大ヒカゲヘゴ毛むくじやらにぐっしよりの雨

洗へども洗へども泥濯げども私に積もる泥の粒子は

宇宙なる同じ素材に出来あがる人の姿を今日クロッキー

人の目に見えぬ故に人間の言葉をもちて暗黒物質

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL 〇三・五九二四・二〇六五
ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail yuriiimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、
メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ
ラギ」誕生。
- ◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続けてき
ました、続いてゆきます。